

田中宗作著

百人一首古注釈の研究



桜楓社刊

人一首古注釈の研究

田中宗作著



著者略歴

た なか そう さく
田 中 宗 作

大正 3 年（1914）5 月 28 日愛知県豊橋市生。
昭和12年（1937）日本大学法文学部文学科卒業。
日本大学教授（文理学部勤務）・文学博士。
著書：「百人一首の鑑賞」（中等教育研究会）
「校訂伊勢物語新註」（東宝書房）
「伊勢物語研究史の研究」（桜楓社）
現住所：東京都世田谷区粕谷町35番地

百人一首古注釈の研究

東京都千代田区神田猿樂町二ノ五	著 者 田 中 宗 作 発行者 南 雲 克 雄 印刷者 共 信 社	昭和四十一年九月十五日 初版印刷 昭和四十一年九月二十日 初版発行
桜 楓 社		定価 二八〇〇円
電話 (291) 五六六〇一二		

百人一首古注釈の研究 目次

百人一首古注釈研究序説……………	七
百人一首宗祇抄に関する覚書……………	三
附、百人一首宗祇抄古版本小考……………	七
細川幽齋の百人一首抄の研究……………	四
皇室における百人一首研究……………	六
一、後陽成天皇の百人一首研究……………	六
二、後水尾院の百人一首研究……………	八
附、道晃親王の百人一首研究……………	九
如儡子の百人一首注釈書について……………	二七
百人一首師説抄について……………	二八
貞徳 頭書百人一首抄と百人一首増註……………	四〇
―加藤磐斎によって編まれた百人一首注の一考察―……………	
切臨の百人一首抄について……………	一三

「見聞抄」と「さねかつら」……………	一七
―河瀬菅雄の百人一首注釈作業についての報告―	
百人一首古注の絵入板本について……………	一五
―像讀抄と基箭抄（増補絵抄）とを対象として―	
百人一首拾穂抄の板本について……………	二六
附、百人一首基箭抄初印本考……………	三九
百人一首秘註についての研究……………	四六
百人一首の真名本について……………	五〇
説法和歌資譚鈔について……………	五六
乾長孝の百人一首評について……………	五八
堀秀成の「百首衆評」考……………	五九
*……………	
百人一首古注の目録についての一考察……………	三四

百人一首注釈板本書目集覧……………	三〇
一、板本となった古注釈書……………	三一
二、活字本に翻刻された古注釈書……………	三六
明治以降の百人一首注釈書について……………	三三
百人一首現代注釈書文献目録(稿)……………	三七
＊……………	
〔附録〕百人一首本文……………	三七
＊……………	
あとがき……………	三五
索引……………	三七

百人一首古注釈の研究

百人一首古注釈研究序説

それ百首は、京極黄門のをぐら山莊しきしの和哥也。それを世に百人一首と号するなり。

このことは、いわゆる百人一首宗祇抄の巻頭のことばであるが、中世以降の相伝の旧注が多少の語句の差異はあるとしても、このことばを襲用して、その巻頭を飾っているものは多いのである。百人一首は、正しくは、小倉百人一首と呼んで処理して行くべき作品と思われるが、古くは「小倉山莊色紙形和歌」・「小倉山莊色紙和歌」・「小倉百首」などと呼ばれていたことは古文獻の徴するところである。百人一首の注釈書・研究書などの関係文獻の多いことは、源氏物語・古今集・伊勢物語等のそれにまさるとも劣らず、国文学研究史の上で、もっとも大きな流れの一つであることは学者のひとしく認めるところである。しかるに、源氏物語や伊勢物語などの多くの主要古典が、すでに研究史としての史的体系が確立し、多くの業績が積み重ねられてきているにもかかわらず、百人一首はややとり残こされている感が深いことは認めざるを得ない現状である。

7 百人一首古注釈研究序説

本書は、百人一首の古注釈に対して、でき得る限りの検討を加え、百人一首研究史確立の資を供せんとす

る目的をもって始めたものの一部分である。百人一首の古注釈個々の研究については、二、三のものを除けば、いずれをとりあげてみても未開拓にひとしいものが多いのである。著者は、ここに、いままで検討してきたもののほぼ十数編を集録して、大方のご叱正を仰ごうとするものであるが、これは百人一首古注釈のほんの一角をついたものにすぎない。現在すでに、検討すべく集めてある資料もかなり多いのであるが、これは第二集に譲りたいと思う。なお、今回の場合、江戸期のうち、とくに江戸前期のいわゆる旧注と呼ばれるものの検討に力をそそいだことになってしまったが、これはこの面の資料はいままでほとんど顧みられず、その検討も少なくいっばんには知られていないようなものが多いために意識的にヒリあげたためである。こうした研究史上の穴を幾分でも補うことができればという微意にほかならないが、考えてみれば管見に入った資料も限られており、誤りを犯す可能性の多いことは免れない。とにかく、結果としては、新資料やいままでもだれもが目をつけなかったものに、とくに力をそそいだ形になり、たいせつなものがおろそかになってしまった感も深いのである。

さて、以上のように、百人一首の古注釈の検討に、幾分なりとも携わって来た者として、百人一首の古注釈のあり方について、考えたことを記しておきたい。百人一首そのものの研究、すなわち、その成立や他の古典との交渉などについては、いままでの学者が決して無関心であったわけではなく、すでにりっぱな成果があげられている。しかし、ここでは、注釈書に焦点をしばって考察をすすめたい。多くの古典がそうであるように、百人一首もまた、これが成立すると間もなく、注釈とか研究とかいうことが始まったであろうこ

とは想像にかたくない。しかも、これが、中世以降歌学の家柄の確立とともに、「詠歌大概」・「秀歌躰之大略」とをひとまとめにして、「三部之抄」の名において、定家の歌学書の中核として尊ばれてきたことはあまりにも有名である。宗祇抄においても、序説の結びを、

此百首は、二条家の骨肉なり。以此歌、俊成・定家の心をもさぐりしるべき夏とぞ師説侍りし。

としていることは、その尊信のほどもうかがわれ、注目すべきことばである。要は、中世歌学においては、百人一首が古典として、学問の重要な地位を占めてきたことである。しかも、中世の学問文芸の中心が歌学にあったということに思いをいたせば、一人一首を百人集めたこの小さな歌集が、いかに多くの問題を含んでいたかということは、おのずから明らかになるであろう。しかし、中世から近世初期にいたる百人一首の世界は、二条家を中心とする貴族階級の古典であって、秘伝・口伝のベールに包まれ、一般民衆の全然干渉するところではなかったのである。

百人一首に関する研究のうち、成立の問題については近來幾多の学者によって注目すべき論考がなされている。これも、百人一首研究史のうち重要な項目であるが、注釈書を中心とする歴史はどのように展開されてきたであろうか。さきにもふれたように、他の古典に遅れ研究史らしい纏まったものの少ない百人一首ではあるが、昭和二十九年刊の小高敏郎・犬養廉両氏著にかかわる「小倉百人一首新釈」（白楊社刊）の附編に収められた「百人一首の成立と研究史」のうち、「(一)百人一首研究史」（同書二六五—二八〇ページ）は、初学者の啓蒙を目標として書かれたもので簡明ではあるが、この方面の文献としてはもっとも纏まったもの

として参考にすべきものであると考える。その論考は、「一、中世の研究、二、近世の二条派歌学、三、国学者達の研究、四、明治以降の研究」のように項目を分けて主要注の流れを中心に考察しておられる。すなわち、その考察で、一は、宗祇抄を中心に、二は、幽齋門下の堂上歌学と貞門の歌学とを中心に、三は、三奥抄や改観抄に始まる国学者らの諸注を中心に述べられたもので、とくに、一、二には、専門家も参考にすべきものが多いように思う。また、江戸時代の百人一首研究を中心としたもので、参考にすべきものに、やや古い文献ではあるが、明治四十一年の永井一孝氏「国文学書史」所収（同書三三五—三五〇ページ）のものがあるが、これは、後稿「百人一首古注釈書の目録についての一考察」のところでふれているので、ここでは割愛する。

これらの文献は、いずれも限られた紙数のもとに書かれたもので、簡明を旨としているために、百人一首研究史の入門書としての役割りは大きいが、詳細な検討考察は望むことはできない。とくに、江戸時代に入ってから百人一首は民衆と深いつながりを持つようになり、かつてのように、歌学の中核としての古典ではなく、婦女子の教養の書として、また、歌がるたという遊戯的な性格なものを通して民衆に開放されて、民衆から愛される古典遊戯的に墮したものの—このことば不当であるかもしれないが—として、現代のこの時点にまで、綿々として続いて来ている。ここに、百人一首研究史の課題として、

- 一、百人一首古注の成立過程とその意義を確立すること。
- 一、百人一首宗祇抄を中心とする古注の発展の系譜を明らかにすること。
- 一、江戸初期の旧注の流れと一般民衆への啓蒙書に移り行く注の形態の推移の問題。

一、百人一首旧注と新注との関係に対する再検討の問題。

一、江戸中期以降の民衆化を中心とする百人一首流布に対する考察。

など、多くの問題があることを提示し、将来の研究目標の資としたいと思う。以上のようなことを考える際、本書所収の拙論が、幾分なりとも役立てば幸甚である。しかし、これらは、さきにも述べたように、きわめて片よってものになってしまっているので、これを埋めるために、本書につづいて第二集、第三集へと発展し、最後に、先学諸賢の考説をも十分織り込んだ「百人一首研究史」への完成に力をそそぎたいと考えている。

百人一首宗祇抄に関する覚書

百人一首の初期の注釈書として、百人一首宗祇抄と呼ばれる一群の注釈書は、その著作者・成立・内容の諸点において、注目すべき幾多の問題を含んでいる。この類の伝本はすこぶる多く、図書館・文庫はもとより、愛書家の篋底に尚蔵せられる数はかなりなものである。その表紙の外題や題簽は、「百人一首宗祇抄」・「百人一首抄」・「百人一首注」・「小倉山莊色紙和歌抄」などまちまちではあるが、その多くは、巻首に、右百首は京極黄門小倉山莊障子色紙和歌也。それを世に百人一首と号する也。是をえらびをかるる夏は、新古今集の撰定家の心になはず。其謂は云々。で始まり、

此百首は、二条家の骨肉なり。以此歌、俊成・定家の心をもさぐりしるべき夏とぞ師説侍し。で終わる序説を持ち、続いて、第一首「秋の田の」の天智天皇の御製から、第百首「ももしきや」の順徳院の御製までの百首に対する解釈本文、その巻尾は、

この御歌と巻頭の御歌は、いづれも王道の心を読給へる内に、上古の風と当世の風とのすがたかはれる

也。よく思ひさとるべしとぞ侍りし。

で終わっているのをつねとする。そして、多くの場合、そのあとにつけられている奥書や、鑑定家の極札などによって、「百人一首宗祇抄」としたり、「宗祇注」と附記したり、何もないものは、不明なままに単なる古注「百人一首抄」・「百人一首注」としたりして、書架に入っている。要するに、宗祇抄自身の序説にも、本文にも、宗祇抄なることばについて、何等ふれるところはないのあるから、いわゆる宗祇抄という呼び名は、宗祇の書写した百人一首の抄（注釈）ほどの漠然としたもので、もちろん宗祇自身の命名によるものではないのである。

宗祇抄は、また、「宗祇註」・「祇註」・「祇抄」とも呼ばれ、この注の先達として尊ばれ、古くから旧注に引用されている。里村紹巴の「百人一首抄」〔天正十年（一五八二）成立〕に、「此百首祇注用之早、但御作者口決在之。」と序説にしるし、注釈の中に「是迄祇注」・「祇注に」と引用し、細川幽斎の「百人一首抄」〔慶長元年（一五八六）成立〕に、序説の中で「祇註は常縁に相伝一通のときに、其聞書をそのまま注したると也云々。」と記し、注釈にあたってはつねに、「祇註に」・「宗祇云」などと引用しているのははじめ、後陽成天皇の「百人一首抄」〔慶長十一年（一六〇七）成立〕には「祇注に」・「宗祇抄に」・「宗祇がいはいく」と引かれ、切臨の「百人一首抄」〔慶安二年（一六四九）成立〕においては、「百人一首当流の諸抄」の最初に「宗祇抄」とあげるなど、室町末期から江戸初期にかけて、古注のよりどころとして、まず第一のものに考えられていたことはたしかである。

尾崎雅嘉〔宝暦五（一七五五）―文政一〇（一八二七）〕の群書一覽（享和六年刊）の解題は、この本の解題とし

ては最初のものであるが、それには、

百人一首宗祇抄 写本 一卷

卷首に大意をあげ、人々の伝をしるして、哥の注は東野州によりてつたへたる説どもせたり。

としている。「写本」とのみあるのを見ると、雅嘉は古活字本はみていなかったらしく、また、「人々の伝をしるして」とあるのを見ると、和歌七部抄所収のもののようなかなりの書き入れのあるものによったのである。福井久蔵博士の「大日本歌書綜覧—中—」（昭和二年、不二書房刊。四八八ページ参照）によると、小倉百首注釈の第一に、藤原満基の「百人一首抄 写一卷」をあげ、「宮内省図書寮に応永十三年自筆の一本あり。（中略）蓋し全部満基の註解を下ししにあらず、主として古人の教に基きたるべし。」と説明され、次いで宗祇の「百人一首抄 一卷」をあげて、

前書と大同小異なり。但し前書の中如何はしきを省き、所々新に説き加へたる所あり。奥書に文明三年東野州より聴聞し、竊に記しつけたるを、文明十年四月十八日宗観へ伝へたる旨記せり。又同じ書にして明応五年の奥書ある一本あり。板本は二冊となせり。上木年代明かならず。

と説明されている。応永十三年（一四〇六）から文明十年（一四七八）まではおよそ七十有余年の隔たりがあり、満基筆応永十三年本と宗祇抄との関係については、すでに有吉保氏の論文「百人一首宗祇抄について—その著者を論じ百人一首の撰者に及ぶ—」（日本大学国文学会編「語文」第一輯所収。昭和二六・一・一五発行。）に詳しいし、とくに氏は、百人一首の注釈書が宗祇抄に始まるとする従来の説を否定して立論されている点に注目すべきである。また、井上宗雄氏は、論文「百人一首とその注釈の伝来に関する一推測」（「古典」第二十